

第9回名古屋大学博物館特別展記録 スポーツと名古屋大学 —する・みる・つくる—

Records of the 9th NUM Special Exhibition “Sports at Nagoya University” — Get fits! Play, Watch, Create —

東田 和弘 (TSUKADA Kazuhiro)¹⁾

1) 名古屋大学博物館

The Nagoya University Museum, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

会場：名古屋大学博物館

会期：平成18年3月22日～9月30日

1. はじめに

大学博物館は、大学と社会の“インターフェース”としての役割を担っており、大学における様々な活動を社会に広く紹介することが求められる。大学は研究教育機関であり、学内の専門教育・研究活動を紹介することは、大学博物館として当然の使命である。しかし大学はそれ以外にも社会にあまり知られていない様々な側面（例えば、社会貢献、社会教育、教職員・学生の課外活動など）を持っており、大学博物館が“インターフェース”としての機能を十分に発揮するためには、それら諸活動を多面的に取り上げ、ありのままの大学の姿を社会に発信しなければならない。

名古屋大学には、部活動やレクリエーションなどを通じてスポーツに親しむ多くの学生が在籍している。これらのスポーツ活動は大学生活や人間形成の中で重要な位置を占めており、本学はそれらに対して様々な支援を行っている。しかし、こうした活動はその重要性にもかかわらず、一般にあまり認識されていないのが現状である。そこで、名古屋大学博物館では総合保健体育科学センター（以下、保体センター）および名古屋大学体育会（以下、体育会）と連携し、第9回特別展として本学におけるスポーツ活動を大々的に取り上げ、学内外に広く紹介した。

2. 特別展準備などについて

平成17年11月、著者はロンドン自然史博物館へ出張した。その機会に本特別展について、Giles



Clarke 博士（前ロンドン自然史博物館展示・教育部門長）への特別展主旨等のブリーフィングを行い、アウトラインについての議論を行った。その結果をふまえて以下のような「特別展アウトライン(案)」を作成し、さらに細部にわたるコンサルティングを受けた。

The Nagoya University Museum **Briefing document for an exhibition on sport**

Possible titles

- Sport for Life: sports at the University of Nagoya
- Sport: a University at Play
- Training for Life
- A Sporting Life
- Time for Sport. Can you afford to ignore it?

Objectives

- To show the range of sports available at the University of Nagoya
- To encourage student participation in sports
- To show why the University provides sports facilities
- To demonstrate the value of sports to students' future lives
- To make the University seem an attractive place for potential students

Target Audience

- Teenagers (potential University students)
- Current members of the University
- The general public

Themes and Narrative Structure

Part 1 What?

An exploration of the range of sporting facilities at the University and of the range of sports played by students.

Part 2 Who?

- (i) Serious involvement in sport leading to high achievement and/or post-university professional involvement
- (ii) Amateur involvement in sport for fun, for fitness and for friendship

Part 3 Why?

Reasons why sport is a worthwhile activity which the University encourages:

- Good training for life: encourages teamwork; teaches collaboration, competitiveness, achievement
- Promotes fitness, health and physical well being
- Gives the opportunity to meet people and make friends (possibly friends for life)
- Fun

Storyline

Many students at the University of Nagoya take part in a wide range of sports. The University provides facilities and encourages its students to use them. Some students take sport very seriously: those studying physical education often intend to make a profession of sport in later life. The University has produced students who compete successfully at an international level.

Most students take part in sports at a more amateur level. In just the way that lion cubs learn the skills they need for adult life by playing, practising the teamwork needed for many sports is an excellent training for many non-sporting activities in later life. Scientific collaboration or creative work in business are just two examples where people need the ability to work with others, and need to know how to influence colleagues. In addition, the friends one makes at university –

often through sport – can be the most rewarding and long lasting relationships of a lifetime.

Physical exercise is an essential component of a healthy lifestyle. Research has repeatedly shown that fitness gained through participation in sport promotes the efficient working of many of the body's functions and can help ensure health throughout later life.

Equally, sport is fun and the satisfaction gained by meeting sporting challenges can be most rewarding.

Potential Media for the Exhibition

- Photographs
- Text
- Video clips of students playing sport
- Sporting equipment
- Recorded interviews with serious and amateur sports enthusiasts
- Arcade games featuring sporting challenges
- Interactives allowing visitors to explore their reaction speeds, strength, pulse rate etc.
- Events in the gallery involving sports celebrities (preferably from the University)
- Information about how to take part in the various sports offered by the University

Potential Events Associated with the Exhibition

- Table football challenge day
- Demonstrations by University martial arts groups
- Appearances by celebrity sports people
- Presentations by University sports clubs

上記の「特別展アウトライン(案)」をたたき台に、保体センター、体育会とともにさらに検討を重ね、以下のような「特別展アウトライン」を確定した。当博物館特別展期間は、通常、7月ないし8月までであるが、本展では七大戦期間をカバーするために、特に9月まで会期を延長した。

第9回名古屋大学博物館特別展 「スポーツと名古屋大学 —する・みる・つくる—」 Sports at Nagoya University – Get fits! Play, Watch, Create –

主催：名古屋大学博物館，名古屋大学総合保健体育科学センター，名古屋大学体育会
期間：2006年3月22日～2006年9月30日

目的

- 名古屋大学におけるスポーツ活動を紹介
 - 主題：体育会運動部の紹介（過去の栄光と現在の活動）
 - 東国体，名阪戦，七大戦などの紹介
 - 体育会主催スポーツ大会の紹介
- スポーツが人間に与える影響について紹介
 - 人間活動におけるスポーツの効能
 - 大学におけるスポーツ施設の紹介と開放

主な客層

1. 名古屋大学の学生（メインターゲット）
2. 名古屋大学の教職員・OB
3. 一般来館者

コーナー構成

- (1) 名古屋大学のスポーツの概要の紹介
 - + 体育会運動部の栄光の歴史（顕著な業績を紹介）

- + 体育会の活動
- + 保体センターの活動
- (2) 名古屋大学の現在のスポーツ活動
 - + 体育会運動部の活動（後半のキーワード＝第45回七大戦）
 - 前半（3～5月）：各運動部を網羅的に紹介
 - 後半（6～9月）：網羅的紹介を縮小。（4）と併せ、東国体、名阪戦、七大戦など、実施中の試合を中心に（ライブ感を重視）
 - + 運動部以外のスポーツ活動（山田杯、スポーツフェスティバル、フットサル大会、須賀杯など）
- (3) スポーツと健康、ハンズオン（保体センター担当）
 - + 「スポーツが人間に与える影響」等をテーマに、保体センターが担当
- (4) 体育会の活動紹介と試合応援コーナー（体育会担当）
 - + 体育会の紹介
 - + 試合ビデオ放映
 - + 試合結果速報
 - + 七大戦Tシャツデザイン、マスコット募集（賞金付き?）
 - + 七大戦Tシャツ、七大戦クリアファイル、七大戦うちわ販売
 - + 総長直筆デザインタオル販売
 - + トト

予想される展示物

- ・ 名古屋大学のスポーツの概要の紹介：写真、メダル、トロフィー、楯、ユニフォームなど
- ・ スポーツ活動：写真、器具、試合結果速報、試合ビデオ放映など
- ・ スポーツと健康：写真、解説DVDなど
- ・ ハンズオン：測定器具など

関連イベントなど

- ・ 運動部によるデモンストレーション
- ・ スポーツ大会
- ・ スポーツ科学連続講座
- ・ 名阪戦・東国体・七大戦壮行会とのタイアップ
- ・ 現役とOB・OGのディスカッション、交流試合
- ・ ワールドカップ放映

今後のスケジュール

- 12月中旬～下旬 体育会を通じて各運動部への協力と出品の依頼
- 12月下旬～1月中旬 各運動部からの出品状況見極め／大まかなレイアウトの決定
- 1月中旬～下旬 レイアウトの詳細決定／ポスターとビラの図案起草と発注
- 2月初旬 ポスターとビラの配付
- 2月初旬～中旬 展示に関する諸物品発注／各運動部へのパネル原稿執筆依頼
- 2月下旬 運動部パネル原稿締め切り／その他解説パネル原稿締め切り／原稿校正
- 3月初旬 展示リハ／パネル発注
- 3月中旬～下旬 大モノ搬入
- 3月22日 オープン

本展は、当博物館所蔵資料や既存のコレクションを中心に行うものではなく、展示資料を一から発掘し、“かき集め”なければならない。したがって、12月中旬に博物館長名で、体育会各運動部長と主将・主務などへの出品依頼を行った（図1）。

山岳部（平成13年廃部）については、山岳部OBの小嶋 智氏を通じて、OB各位への呼びかけを行った。その他、キタン会所蔵の名古屋高等商業学校（以下、名高商）関連資料と、大学文書資料室所蔵の山岳部資料については、未整理だったためリストを作成し、それぞれと資料の借用交渉を行った。また、秩父宮記念スポーツ博物館、毎日映画社、およびNHKと、オリンピック金メダルや映像資料の借用交渉を行った。さらに、第八高等学校（以下、八高）や名高商、岡崎高等師範学校、名古屋

屋帝国大学とその前身校の各OB会誌、校史、記念誌等より、各校の運動部関連トピックスを探し出し、当時の新聞記事を検索するとともに、資料の存否について関係各機関・各位への問い合わせを行った。

資料がある程度集まった段階で、展示レイアウト案(図2)を作成した。本展では、「特別展アウトライン」の「(2)名古屋大学の現在のスポーツ活動」コーナーを展示室中央に配し、他コーナーでその周囲を囲むことによって、「歴史やサポーターなどに支えられて(囲まれて)、“現在のスポーツ活動”が存在する」ことを表現した(図2a)。展示室の壁には名大スポーツの歴史に関するトピックを配置し、入り口付近から奥へ向かって年代が新しくなるようにした(図2b)。名古屋大学の歴史に関して来館者の理解を助けるために、「名古屋大学の前身校」コーナーを前室に設置した(図2)。本展の一番の目的は、「名古屋大学における“ありのまま”のスポーツ活動の紹介」である。そこで、本展のコアとなる「(2)名古屋大学の現在のスポーツ活動」コーナーは、新歓期にあたる会期前半は各運動部の活動紹介を、各種大会と重なる会期後半は、試合結果速報やビデオクリップなど、ライブ感を重視した展示を計画した。会期前半の展示については運動部から出展希望

平成 17 年 12 月 12 日

体育会各運動部主将、主務、団長、キャプテンの皆様

第 9 回名古屋大学博物館特別展への出品について(依頼)

名古屋大学博物館館長 足立 守

皆様にはますます時下清栄のこと存じます。

当博物館では、研究・教育に限らず、様々な角度から「名古屋大学の姿」を学内外に広く紹介すべく、これまで展示活動や、多数の関連イベントを開催してきました。名古屋大学には、部活動やレクリエーションなどを通じてスポーツに親しむ多くの学生が在籍しています。これらのスポーツ活動は大学生活や人間形成の中で重要な位置を占めており、本学はそれらに対して様々な支援を行っています。しかし、こうした活動はその重要性にもかかわらず、一般にあまり認識されていないのが現状です。

そこで、当博物館では総合保健体育科学センターおよび体育会と連携し、第9回特別展として本学におけるスポーツ活動を大々的に取り上げ、学内外に広く紹介する予定です。本展開催にあたり、是非とも各運動部の皆様のご協力を仰ぎたく、お願いする次第です。

具体的には、以下のような資料を各運動部でお探しいただき、適当な資料がございましたら、是非とも本展への出品をご検討くださいますようお願い申し上げます。

- (1) 部の歴史を物語る資料(例えば、昔の練習や試合などの写真、部誌、スコアブック、大会プログラムやポスターなど)
- (2) 部の歴史を物語る器具、ユニフォームなど
- (3) 顕著な業績や記録(例えば全国・地区優勝など)をあげたときの写真、映像、新聞記事など
- (4) 顕著な業績や記録を示す、賞状、優勝旗、メダル、トロフィー、楯など
- (5) 大きな試合(例えばオリンピック、ワールドカップ、世界陸上・水泳など)と部の関係を示すもの(例えば、部出身の先輩が選手/審判として使用した器具やユニフォーム、それを示す資料など)
- (6) 部出身の著名人に関するもの(例えば、オリンピック選手や著名研究者・財界人の思い出の品、部と著名人との交流を示す資料など)
- (7) 業績や歴史などの付加価値はないが、古くなって現在使っていない器具など
- (8) その他、部の活動や歴史を示すうえで、特に優れた資料

なお、資料の展示法につきましては、各運動部と相談の上決定しますが、必ずしもご希望にそえない場合があることを、あらかじめご承知ください。

お申し出やお問い合わせは、足立 守(789-3002、adachi@num.nagoya-u.ac.jp)、または東田和弘(789-5768、tsukada@num.nagoya-u.ac.jp)または博物館事務室(789-5767)までご連絡ください。特別展準備スケジュールの都合上、平成 18 年 1 月 20 日(金)までにお申し出下さると大変助かります。

大変お忙しいとは存じますが、ご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

図1 体育会運動部主将、主務、団長、キャプテンへの出品依頼文。

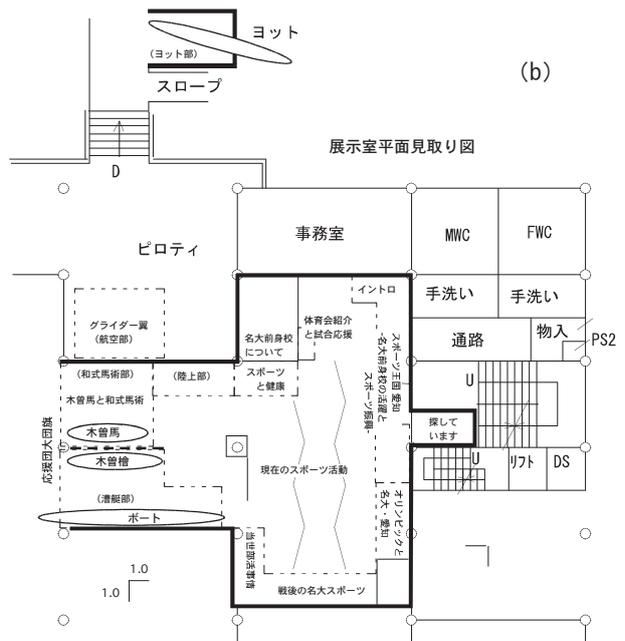
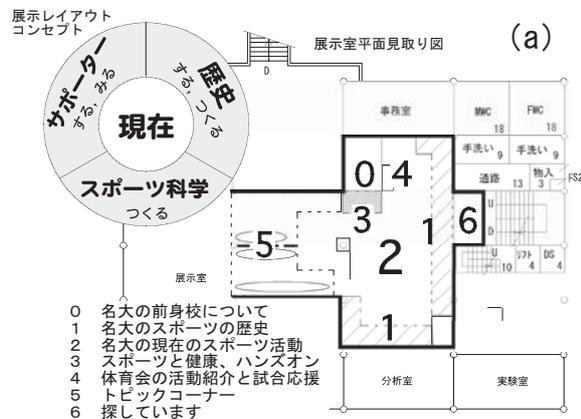


図2 (a) 展示レイアウトコンセプトと室内のコーナー割り当て。太線内が特別展会場。(b) 各展示テーマとその配置。

を募り、それぞれの運動部に担当ブースを割り当て、自由に活動紹介の展示を行ってもらった。出展希望を募るために3回の展示説明会を行い（のべ23運動部が参加）、最終的に28運動部が展示に参加した。「特別展アウトライン」にはなかったが、歴史が長く、且つ諸資料がよく保存されている漕艇部と陸上部、および平成16年度に新設された全国唯一の和式馬術部については、「トピックコーナー」として別にスペースを割り当てた（図2）。これらについても、各部で展示構想を行ってもらった。キタン会所蔵資料リスト作成の過程で「名高商時代のものではあるが、そのゆかり等がわからなくなっているもの」が多数存在することが判明した。それらについては「探しています」コーナーを設置し、資料の由来などについて来館者から情報提供を募った（図2）。その他、各運動部より特別展関連イベントを募ったところ、次のような希望があった（順不同）。流鏝馬のデモンストレーション（和式馬術部）、ちゃんこ試食会（相撲部）、演武（少林寺拳法部）、舞踏コンサート（舞踏研究会）、公開スパーリング（ボクシング部）、アメリカンフットボール体験とキック大会（アメリカンフットボール部）、OB総会（ヨット部、陸上部）、試射会（弓道部）、OB名阪戦（卓球部）

3. 特別展の開催

以下、本展で展示した解説資料等に基づき、展示資料および展示コーナーの様子について説明・紹介する。文章表現については、解説資料に即した形で以下にとりまとめた。

ごあいさつ

このたび、第9回名古屋大学博物館特別展として、『スポーツと名古屋大学 ―する・みる・つくる―』を、総合保健体育科学センターおよび体育会と共催する運びとなりました。こうした大学スポーツに関する特別展が博物館で行われることを少し不思議に思われる方もあるかも知れませんが、大学博物館だからこそできる、あるいは、大学博物館だからこそ取り組むべき大事な課題と考えています。

名古屋大学の前身校、とりわけ文武両道の気風が強かった教養部の前身である第八高等学校（八高）や経済学部前身の名古屋高等商業学校（名高商）からは、オリンピックの金メダリストを含む多くの優れたスポーツ選手（かつ、各界のリーダー）が育ち、その伝統は現在にも受け継がれています。

この特別展では、あまり知られていない名大スポーツ史を掘り起こして紹介するとともに、スポーツに打ち込んだアスリートの生き様についてもスポットを当てています。現役部員の手作りによる各運動部の紹介コーナーが会場の約半分を占め、学生参加型の特別展になっているのも大きな特徴の一つです。会期中には、総合保健体育科学センターの教員による12回のスポーツ科学連続講座が開催されるほか、運動部OBらによる座談会、各クラブデイにおけるスポーツ体験イベント、名阪戦・七大会応援コーナーの開設など、盛りだくさんのイベントが予定されています。多くの方の参加をお待ちしています。

本特別展が名古屋大学の歴史・人の再発見にとどまらず、人間力を育むスポーツを今一度考えるきっかけとなり、さらに、この特別展を通して、運動部・名古屋大学という枠を超えた異分野交流が進展することを願っています。こうした交流の場は、博物館が目指している“ミュージアム・サロン”そのものと思います。

特別展の開催に当たり、Giles Clarke博士、キタン会（其湛会）、秩父宮記念スポーツ博物館、毎日映画社、そして数多くの名古屋大学スポーツ関係者（各運動部の現役部員・OB・部長など）の方々から資料提供や意見交換で多大なご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

展示と解説

コーナー0「名古屋大学の前身校（前室）」

名古屋大学の歴史

名古屋大学の起源は、明治4～5年（1871～1872年）に相次いで設立された、仮病院と仮医学校にさかのぼることができます。その後、仮病院・仮医学校は、公立医学校（明治11年、1878年）、愛知医学校（明治14年、1881年）、愛知県立医学校（明治34年、1901年）、愛知医科大学（大正9年、1920年）、名古屋医科大学（昭和6年、1931年）と組織替えをし、昭和14（1939）年に誕生した名古屋帝国大学（名帝大）の土台となりました。

このころの名古屋には、名帝大のほかに、第八高等学校（八高：明治41年、1908年設立）、名古屋高等商業学校（名高商：大正9年、1920年設立）、名古屋高等工業学校（明治38年、1905年設立）の3つの国立高等教育機関がありました。戦後の学制改革によって、名帝大は昭和22（1947）年に旧制名古屋大学に変わり、そして昭和24（1949）年には八高、名高商、岡崎高等師範学校を包括した新制名古屋大学として再出発しました。

その後、いくつかの学部、研究科、研究所、研究センター、博物館（平成12年、2000年）が設置され、平成16（2004）年に国立大学法人名古屋大学に衣替えし、2院9学部13研究科3研究所32センター・施設（図書館、博物館などを含む）を有する、中部地方の中核大学として現在に至っています。

戦前の学制

戦前の学校制度は現在とは全く異なっていました。義務教育は尋常小学校（6年制）までで、さらに学びたい人は高等小学校（2年制）や中等学校（4～5年制）、高等女学校（4～5年制）などに進みました。したがって中等学校の高学年生は、現在の高校生と同じです。中等学校を終えた学生の一部は、高等学校（3年制）、あるいは高等商業学校（3年制）や高等工業学校（3年制）などの専門学校に進み、さらに勉学に励みました。専門学校生の大部分は卒業後に就職しましたが、高等学校卒業者は大学などに進学する人も多かったようです。大学は現在と違って3年制（医学部は4年制）でした。

全く浪人・留年せずに大学を卒業した人の場合、17歳で中等学校を卒業、19歳で高等学校を卒業、22歳（医学部は23歳）で大学を卒業したことになります。したがって学齡的には、戦前の高等学校は現在の「大学教養課程」、専門学校は現在の「専門学校や短大」にあたります。しかし、当時の高専では非常に高度な専門授業を行っており、現在の単科大学にあたるといっても過言ではありません。実際に、名古屋工業大学（前身は名古屋高等工業学校）や小樽商科大学（前身は小樽高等商業学校）などのように、国立単科大学の前身となっているケースは少なくありません。

名高商の赤松要教授は、学友会機関誌『剣綾』の中で、「剣綾（名高商）を離れてみて剣綾の価値がわかる。北陸の畏友O教授は名古屋に来るたびに「名古屋高商は大学だ」言った。それは決して御世辞だけではない。実際に剣綾学園は商業経済の単科大学にあたるのみではなく、総合大学としての偉容を有することは全く驚嘆に値する」と述べています。

名高商は名大経済学部の、岡崎高等師範学校は名大教育学部の前身です。

ナンバースクールと高等商業学校

戦前には、“ナンバースクール”と呼ばれる、第一高等学校から第八高等学校までの、8つの国立高等学校がありました。ナンバースクールは戦前のエリート養成の一翼を担っており、卒業生の多くは大学に進学しました。ナンバースクールの卒業生数よりも帝国大学（東京、京都、東北、九州、北海道、京城、台北、大阪、名古屋）の入学定員数の方が多かったため、ナンバースクール卒の志望者は多くの場合、無試験で帝国大学に入学できたようです。高等商業学校は商業・経済の専門家を養成

する高等教育機関で、名高商は6番目の国立高等商業学校として設立されました。八高と名高商の卒業生は、政・財・官各界で現在も活躍しています。

コーナー1「名古屋大学のスポーツの歴史（展示室東側・南側壁面）」

スポーツと名古屋大学

名古屋大学が、かつて全国に名をとどろかせたスポーツを強豪校であったことをご存じでしょうか？ 名古屋大学経済学部の前身である名古屋高等商業学校（名高商）の清川正二氏は、昭和7（1932）年のロサンゼルスオリンピック100m背泳で金メダルを獲得しています。また同校の稲垣登氏は、大正13（1924）年の全国学生相撲大会で学生横綱になっています。そして戦後の貧しい中、歯を食いしばってスポーツに打ち込んだ人たちがいました。昭和25（1950）年、陸上競技部の高川敏夫氏は、日本学生陸上競技対抗選手権大会110mハードル走で、早稲田、慶応の選手を押さえて優勝しています。

最近では、それまであまりメジャーでなかったスポーツのクラブや、全国でも例を見ないユニークなクラブが誕生しています。また、戦後に一旦途絶えてしまったクラブが復活した例もあります。そして現在は、以下の56クラブが活躍しています。

アーチェリー部、合気道部、アイスホッケー部、アメリカンフットボール部、応援団、オリエンテーリング部、空手道部、正道会館空手、武神会空手同好会、空手道錬成会、弓道部、剣道部、航空部、サイクリング部、自動車部、柔道部、少林寺拳法部、水泳部、スキー部、相撲部、男子ソフトボール部、女子ソフトボール部、体操部、卓球部、男子硬式テニス部、女子硬式テニス部、男子ソフトテニス部、女子ソフトテニス部、トライアスロン部、日本拳法部、馬術部、和式馬術部、男子バスケットボール部、女子バスケットボール部、バドミントン部、男子バレーボール部、女子バレーボール部、反射道部、ハンドボール部、フィギュアスケート部、フォーミュラーチームFEM、舞踏研究会、ボート部、ボクシング部、硬式野球部、準硬式野球部、軟式野球部、ヨット部、ライフル射撃部、ラグビー部、男子ラクロス部、女子ラクロス部、陸上競技部、ワンダーフォーゲル部、ゴルフ部、サッカー部

この中には、全国有数の強豪クラブや、合宿所で共同生活を送っているクラブ、私立大学運動部顔負けのハードな練習を行っているクラブなど、一般の“名大生”のイメージからは想像もできない、彼ら・彼女らがいます。

名大スポーツの過去～現在には、「あまり知られていない事実」が本当にたくさんあります。

スポーツ王国 愛知（図3）

—戦前のスポーツ界—

戦前の日本スポーツ界はアマチュアスポーツが主流でした。野球では東京六大学のリーグ戦であったように、その牽引役は大学・高校（現在の大学教養課程）・高等専門学校（現在の単科大学）スポーツで、当時の人々は地元の学校や、出身校の応援に熱狂しました。

名大教養部の前身である第八高等学校（八高）は第四高等学校（現在の金沢大学）との対校戦を定期的に行い、名古屋駅前では、両校応援団による派手な応援合戦が繰り広げられました。

—八高・名高商スポーツの強化と地域スポーツ振興—

八高・名高商スポーツの黎明期には、外国人教師の熱心な指導により、野球やテニス、陸上競技などの“輸入スポーツ”が盛んになりました。アメリカ人教師のパークヒルは、両校で陸上競技やテニス、バスケットボールを指導し、後に全国随一となる両校陸上競技部の礎を築きました。

また、両校運動部は「自校スポーツの強化には、地域の中学スポーツの振興が不可欠」と考え、各種の「中学スポーツ大会」を盛んに開きました。その結果、中学校どうしが競いあい、地域の中学スポーツのレベルが上がりました。このようにして、後に全日本選手やオリンピック選手を何人も輩出する「スポーツ王国愛知」の基礎が作られたのです。

オリンピックと名大・愛知（図3）

—オリンピックと愛知—

ロサンゼルス・ベルリン両オリンピックには、たくさんの愛知県出身の選手が出場し、活躍しました。ベルリンオリンピック 200m 平泳ぎで金メダルを獲得した前畑秀子氏（前畑、がんばれ！の絶叫放送で有名）も、当時、椋山女子専門学校（現在の椋山女学園高校）の学生でした。その他、中京高等女学校（現在の至学館高等学校）などもオリンピック選手を輩出しています。



展示解説：全国中等学校排球大会優勝旗

（社団法人キタン会所蔵）

八高・名高商バレーボール部は、それぞれ、全国中等学校排球（バレーボール）大会を主催しました。“全国”を冠してはいますが、参加校は、八高主催は東海3県と近畿・中国・四国、名高商主催は愛知・三重など近県にとどまっていたようです。両校はこの大会を通じて東海・全国中学バレーボール界のレベルアップを図ると同時に、優勝校から有力選手をスカウトして実力をつけていきました。この頃のバレーボール界は、神戸高等商業学校（現神戸大学）のあった近畿と八高のあった東海を中心に発展しました。

この優勝旗（図3の左側）は名高商主催のものであります。

図3 コーナー1の「スポーツ王国 愛知」と「オリンピックと名大・愛知」の様子。

—オリンピックと名大—（図4、5）

清川正二氏は名高商3年生の時に、昭和7（1932）年のロサンゼルスオリンピック 100m 背泳で金メダルを獲得しました。当時の新聞各紙は、この時の地元の熱狂ぶりをよく伝えていきます。さらに、清川氏は昭和11（1936）年のベルリンオリンピックにも出場し（当時、東京商科大学）、この時にも背泳 100m で銅メダルを獲得しています。

なお、ベルリンオリンピックには、八高出身の中川春好氏（当時、東京帝国大学）もボート競技選手として出場しています。



図4 清川正二氏のオリンピック金・銅メダル（レプリカ）と、オリンピックオーダー写真の展示。



図5 ロサンゼルスオリンピック100m背泳金メダル（左）とベルリンオリンピック100m背泳銅メダル（右）。いずれも秩父宮記念スポーツ博物館所蔵。3月22日～30日、5月30日～6月10日、9月25日～30日の3回、清川氏のオリンピックオーダー銀賞、ロサンゼルス・ベルリン両オリンピック選手章とともに同博物館より借用し、期間限定で展示した。それ以外は、レプリカと写真による展示を行った。

強豪 八高・名高商（図6）

大正から昭和初期にかけての八高と名高商は、まさにスポーツ強豪校の名を欲しままにしていました。名高商の清川正二氏（ロサンゼルスオリンピック金メダリスト）や稲垣登氏（大正13年の学生横綱）のほか、昭和初期の八高漕艇（＝ボート）部は無敵の強さを誇り、全国高校大会で優勝を6回しています。また、昭和11（1936）年のベルリンオリンピックで、ボート競技に出場した中川春好氏は、八高漕艇部出身です。テニスでは昭和12（1937）年に八高と名高商が全国大会高校の部と高専の部でアベック優勝し、また陸上競技部は全国大会の常勝校でした。その他、水泳部、バレーボール部、野球部、弓道部、剣道部、柔道部なども全国大会で優勝をしています。

【相撲部】（図7）

名高商の稲垣登氏は、大正13（1924）年の全国学生相撲大会で学生横綱になり、吉田司家より練絹などを授かっています。稲垣氏は名高商に第2回生として入学し、那須秀一氏や土岡昌作氏とともに、相撲部創設時の主力メンバーとして活躍しました。この大正13年の大会では、名高商は団体戦（稲垣・那須・本濱）で3位の成績を収めています。また、昭和5（1930）年



図6 コーナー1の「強豪 八高・名高商」の様子。



図7 稲垣登氏が吉田司家より授かった練絹手綱と目録（名大相撲部所蔵）。稲垣登氏は、大正13（1924）年の全国学生相撲大会で学生横綱（当時、名高商3年生）になり、吉田司家より練絹などを授与された。

の全国学生相撲大会では、決勝戦で早稲田大学に破れたものの、団体準優勝の成績を取っています。

吉田司家：故実例式を伝承する家柄を司家といい、吉田家は相撲の司家の一つです。吉田家次追風を始祖とし、代々「追風」の号を名乗っています。

【山岳部】(図8)

八高の熊沢正夫氏は、大正14(1925)年に冬季駒ヶ岳の初登頂を成し遂げました。

【バレーボール部】

昭和初期の頃、八高バレーボール部は4回の全国高等専門学校排球大会優勝(そのうち、昭和9年～11年は三連覇)を飾っています。八高バレーボール部は本田武夫、佐藤金一、大槻義公、土屋研一らをはじめ、何人ものアジア大会日本代表や全日本クラスの選手を輩出しています。昭和10年代には名高商バレーボール部が台頭し、両校はライバルとして切磋琢磨しあいました。名高商バレーボール部は、昭和17(1942)年の全国高商排球大会で優勝をしています。

【弓道部】

弓道でも両校は強豪校でした。名高商は、全国高商弓道大会や全国弓道選手権大会で優勝しています。当時の試合の様子は、八高弓道部誌にも記されています。

【漕艇(ボート)部】

昭和初期の八高漕艇部は、全国大会で何回も優勝しています(ボート部の展示をご覧ください)。これは、昭和10(1935)年の第6回全国高等学校優勝競漕大会で優勝したときの賞状です。このときのクルーには、後にベルリンオリンピック代表選手となった中川春好氏(当時、東京帝国大学)がいました(図9)。

【テニス部】

八高・名高商テニス部は、東海地方のライバルとして競い合い、昭和12(1937)年の全国大会では、それぞれ高校の部と高専の部で優勝しています。このときの様子は名高商庭球部後援会誌にも詳しく述べられています。

【陸上部】(図10)

名高商の陸上競技部は、高商スポーツ界で強さを誇り、第1、2、3、7、10回全国高等商業学校陸上競技大会で優勝をしています。



図8 八高山岳部部旗(大学文書資料室所蔵)。



図9 第6回全国高等学校優勝競漕大会優勝賞状(名大漕艇部所蔵)。



図10 第7回全国高等商業学校陸上競技大会優勝旗と全国高等商業学校陸上競技大会優勝カップ(キタン会所蔵)。

戦後の名大スポーツ

太平洋戦争によって日本のスポーツも大きな打撃を受けました。戦後、八高、名高商、岡崎高師、名帝大が「新制名古屋大学」に統合される中、それぞれの学校の運動部すべてが新制名大の運動部に合流したわけではなく、名高商の“キタンラグビー部”のように、旧校独自のクラブとして活動を続けたものもあります。この時代には、それぞれの道を模索しながらも、スポーツに打ち込んだ人たちが多くいました。

【硬式野球部】（図 11、12）

昭和 24（1949）年に名大硬式野球部として誕生し、黎明期には愛知大学野球リーグで 5 連覇の偉業を成し遂げています。当時の部員たちは、貧しさの中で必死に頑張り、発足当時から同リーグの主導的役割を担ってきました。練習には安価な竹製バットを使用し、折れてもテープで補修して大切に使いました。昭和 25（1950）年には法政大学を 5 対 2 で破り、その業績により全日本選手権への出場を認められています。平成元年（1989 年）には愛知大学野球界への功績が認められ、愛知大学野球連盟より功績表彰を受けています。



図 11 コーナー 1 の「戦後の名大スポーツ【硬式野球部】」の様子。



図 12 昭和 20～30 年代に硬式野球部で使われた用具（名大硬式野球部所蔵）。バットは竹製。グリップ上部が折れており、テープで補修してある。スパイク金具は釘で靴に固定されている。

【バレーボール部】

昭和 24（1949）年に八高、名経専（名高商の後身）、岡崎高師、旧制名大の統合によって新制名大が誕生し、「名大バレーボール部」としての活動が始まりました。八高と名高商はバレーボール界の名門校でしたが、戦争によって壊滅的な打撃を受けました。当時の八高バレーボール部について、名古屋大学バレーボール部創部 60 周年記念誌には、

「昭和 21 年春には、今川部長の「バレーに経験を有する者集れ」の呼びかけに応じ、早くも排球部が発足した。爆弾が落ちて大穴があき、水溜りとなっていた剣ヶ森のコートを全員協力して瓦や土を集めて埋め整備した。ボールは寮に残っていた使い古しが 1 個か 2 個しか無かったし、ネットもバレー用かテニス用か区別のつかぬ程破れたものを補修して使った。河和の航空隊の焼跡の木材を運んでポールにし、薪木に盗まれるのを防ぐため、練習のあと外して隠した。物資不足でユニフォームとてなく上半身裸で、靴もなく裸足で練習を始める。」と書かれています。

昭和 27（1952）年に誕生した女子バレー部にはユニフォームがなく、スカートなど思い思いの服装

で練習や試合を行っていました。



図13 昭和30年頃の女子バレーボール部東海大学リーグ戦（『名古屋大学バレーボール部創部60周年記念誌』CD版所収）。

展示解説：昭和30年頃の女子バレーボール部東海大学リーグ戦（図13）

『名古屋大学バレーボール部創部60周年記念誌』CD版所収写真

名古屋大学バレーボール部創部60周年記念誌の中で、当時主将を務めた五味道子氏は「女子学生の絶対数が少ないので、部員の確保は大変な苦労だった。それに、物資も豊富でなかった頃のことなのでユニフォームをそろえることなく、みなそれぞれの服装で試合に臨んだので「まるでファッションショーみたい」と苦笑し合ったこともある。」と述べています。

【山岳部】（図14）

大正時代からの歴史と伝統を誇る名門クラブです。戦後も、星野洸・西村晃両氏による剣岳源治郎第1峰平蔵側上部フェース（通称 名大ルート）初登攀昭和30（1955）年など、数々の業績を残しています。また、ヒマラヤや南米など海外遠征も何回となく行っており、その多くは学術調査を伴っていました。

輝かしい歴史を持っていた山岳部も部員の減少を食い止めることができず、平成13（2001）年から活動を停止しています。

展示解説：彼らを魅了した山「ジェディボフラニ峰」（図14 後ろ右側）中日新聞社『西ネパール第3の峰』所収写真



図14 コーナー1の「戦後の名大スポーツ【山岳部】」の様子。手前のピッケル（長い方）は、昭和30（1955）年に星野洸氏が剣岳“名大ルート”初登攀に使用したもの、奥のピッケル（短い方）は、堀田誠三氏がネパール ジェディボフラニ峰アタックに使ったもの（星野 洸氏、堀田誠三氏所蔵）。後ろ右側写真は、名大隊最高到達点から望んだジェディボフラニ峰。

名大山岳部は、数々の海外遠征を行いました。その一つに、西ネパールジェディボフラニ峰遠征があります。当時、この山はネパール政府でさえ存在を把握しておらず、ネパール政府発行登山許可証には「ナンパ南峰 (Nampa South Peak)」と記載されています。“ジェディボフラニ”という名称は地元で確認し、地形調査や水質調査、気象観測など学術調査を行いながら登りました。しかし、登頂を目前にしたところで、シェルパの死亡などトラブルのため引き返さざるを得ませんでした。この写真は、名大隊最高到達点よりジェディボフラニ峰頂上 (6940 m) を望んだものです。

【ヨット部とチタグループ】(図 15)

<チタグループの活動>

戦前から戦後にかけての名大ヨット部では、小艇による近海クルージングが盛んでした。特に昭和 20～30 年代は、ヨット部史上、「大航海時代」と呼ばれるほど、伊勢湾や三河湾でのクルージングを頻繁に行っていました。

昭和 34 (1959) 年には、5 人のヨット部 OB が、外洋帆走艇「CHITA」号とともに潮岬～横浜にいたる外洋クルージングを始め、日本で外洋クルージングが流行するきっかけとなりました。この「CHITA」号を中心に集まったヨットマン達は“チタグループ”と呼ばれています。

昭和 39 (1964) 年には、チタグループはさらに大きな「CHITA II」号で海外に進出し、日本ヨット界初の「合法的」太平洋往復航海を含む、数々の偉業を達成しました。

昭和 44 (1969) 年、「CHITA II」号よりも高性能の「CHITA III」号が建造され、このころには太平洋渡航やハワイ～南太平洋クルージングを行ったほか、香港 - マニラレースや沖縄 - 東京レースなど、数々のレースで優勝しています。

チタグループは 1960～1970 年代にかけて、クルージングやレースだけではなく、造船設計技術においても日本外洋ヨット界で最も注目されたグループでした。また、チタグループは名大ヨット部 OB が中心となりましたが、ヨット部 OB 以外からも多くの人材を受け入れ、若手ヨットマンを育ててきました。チタグループの活動は 1980 年代に発展的に解消しましたが、現在も、外洋帆走艇「とくまる」を中心とする“シャングリラグループ”などによって、その伝統は受け継がれています。

<クルーザーと外洋レース>

ヨットの中で、ギャレー (台所) とナビゲーション (現在地と針路の算出) の機能を備えたものをクルーザー (巡航艇) といいます。

ヨットの中での食事は、1 日や 2 日くらいの航海ならコンビニ弁当でも済みますが、数日以上にわたる航海では、主に缶詰やインスタント食品、レトルト食品などを利用します。長期航海では、生鮮野菜は最初の 1 週間で尽きてしまい、続いて果物がなくなります。魚が飛び込んでくれば御馳走です。

炊事設備は、6～7 m の小型クルーザーではキャンプ用の道具とほぼ同じですが、10m 以上の大型艇ではレンジやシンクを、エンジンを持つ艇では電気冷蔵庫を備えた艇もあります。航海設備は海図テーブルのほか、位置測定や通信の機器があります。位置測定には、以前は六分儀 (天体高度を測る



図 15 コーナー 1 の「戦後の名大スポーツ【ヨット部とチタグループ】」の様子。

機器) を使っていましたが、現在は GPS (全地球測位システム) 受信機が主流です。

乗員が寝る場所をバースといい、毛布や寝袋、私物を置きます。航海中の衣類は、登山やスキーなどの野外スポーツとほぼ同じですが、良い防水衣は必需品です。

クルーザーのうち、外洋レース (オーシャンレース) 用に作られたものを、オーシャンレーサーといいます。オーシャンレーサーは、高速力・高性能を最優先に設計されており、重量を軽くするために厳選された材料で建造されます。また、針路設定のための気象観測設備や位置測定設備が充実する一方で、居住設備は簡素化されています。搭載品は、軽重量でクルーの負担をできるだけ少なくするように、あらゆる工夫が施されており、食料もできるだけ軽くて、且つスタミナを維持できるものを選びます。

昭和 50 (1975) 年の沖縄海洋博覧会記念 単身太平洋横断レースで、ヨット部 OB の戸塚 宏氏は、日本で建造された「ウイング・オブ・ヤマハ」号で、2 位に 4 日間の差を付けて優勝しました。このレースで戸塚氏が「箸の長さを半分にしてまで総重量を軽くし、レース中の 41 日間、(操船のために) 目覚まし時計をかけて 15 分刻みで睡眠を取った」ことは、ヨット界で有名です。



図 16 「ウイング・オブ・ヤマハ (1/20 モデル)」と「A 級単一型 12 尺ディンギー (1/10 モデル)」(大橋郁夫氏所蔵)。

展示解説：「ウイング・オブ・ヤマハ (1/20 モデル)」(図 16 手前)

全長：10.67 m、幅：3.38 m、総重量：3200kg

設計：G. Cockshot (イギリス)、1900 年代初期

昭和 49 (1974) 年 9 月、名大ヨット部 OB の戸塚 宏氏は、翌年に開かれる沖縄海洋博覧会記念 単身太平洋横断レースへの出場を決めました。そして昭和 50 (1975) 年 3 月、ヤマハ発動機は戸塚氏のレースにかける熱意に同調し、「戸塚氏のための艇」建造のためのプロジェクトチームを立ち上げました。同年 6 月 5 日に艇は進水し、「ウイング・オブ・ヤマハ」と命名されました。「ウイング・オブ・ヤマハ」号は徹底的に無駄を省いた“勝つための艇”として設計され、重量が通常のこのクラスの艇の 5 分の 3 しかないだけでなく、ウィンドベーン (自動操舵装置) や太陽電池システム、体力消耗を防ぐためのスイング式ベッドなど、日本初の試みを満載したものでした。

この艇とともにレースへ出場した戸塚氏は、2 位に 4 日間の差を付けて圧勝し、世界のヨット界にその名をとどろかせました。

展示解説：「A 級単一型 12 尺ディンギー (1/10 モデル)」(図 16 奥)

全長：3.648 m、幅：1.422 m、深さ：5.21m、帆面積：9.24 m²、総重量：288kg (帆走時)

設計：G. Cockshot (イギリス)、1900 年代初期。船体は丸底、鎧針、無甲板で、典型的な木造ボートの構造。スオート (漕手座) 2 列を備える。

昭和 40 年代まで、日本で最も普及していた小型ヨットのクラス (形式) です。ムーラン (1924 年)・アムステルダム (1928 年) 両オリンピックで使用され、日本では、昭和 7 (1932) 年の日本ヨット協会設立と同時に、国内規格艇に指定されました。そして、昭和 10 年代後半には 200 隻以上が、戦後

はその数倍の艇が、基礎練習から全国大会まで幅広く使用され、名大ヨット部でも主力艇として活躍しました。日本では、昭和 50 (1975) 年ごろから新しい艇が普及し、現在はほとんど使用されなくなりましたが、ヨーロッパでは今でも根強い人気があります。元々は、大型の巡航用ヨットの搭載艇をモデルとして作られたもので、帆走・漕走両方の機能を備えています。作業用や近距離航海だけではなく、数 10 カイリの遠距離航海にも使用される万能艇です。

<日本人初の太平洋往復航海>

昭和 40 (1965) 年 6 月 6 日午前 10 時、吉田広明氏 (艇長)、曾我二郎氏 (副長)、内田建介氏の 3 名を乗せた「チタ II」号は、愛知県常滑市鬼崎港から太平洋横断航海に出発しました。そして 55 日間の航海の末、7 月 29 日午後 6 時 25 分 (所要時間：54 日 20 時間 25 分) にロサンゼルスに到着しました。事前に、沖縄への試験航海など入念な準備を行ったため、航海中に大きなアクシデントはありませんでしたが、2 ヶ月近くにわたる洋上生活は過酷を極めました。

復路では戸塚 宏氏、坪井恒彦氏、竹内佐知彦氏が合流し、トランスパシフィックヨットレース (ロサンゼルス～ホノルル間レース) に出場しましたが、レース中、西経 145° 地点でマストが倒れてしまい、洋上で応急処置をしてホノルルに向かいました。日本へ帰るためにはヨットを修理しなくてはならず、クルー達はホノルルで皿洗いなどのアルバイトをしてお金を貯め、ヨットを修復しました。そして昭和 40 (1965) 年 11 月、吉田・曾我・戸塚の 3 氏は、ホノルルから 55 日間かけてチタ II 号とともに名古屋港に戻ってきました。

堀江謙一氏が日本人として初めてヨットで太平洋横断したのは、昭和 37 (1962) 年のことです。「チタ II」号の航海は、「日本人初の太平洋往復航海」として注目を集めました。

当世部活事情 (図 17)

スポーツ界の主流が学生スポーツから実業団・プロスポーツと変わっていく中、近年の名大スポーツには、一部を除き、昔のような強さは見られません。しかし、最近では、これまであまりメジャーではなかったスポーツが盛んになるとともに、他大学には見られない、ユニークなクラブも誕生しています。

また、戦後長らく途絶えていたクラブを復活させた例がある一方、部員の減少を食い止めることができず、戦前からの長い歴史に幕を下ろしたクラブもあります。

【少林寺拳法部】

日本の“少林寺拳法”が純粋な中国拳法ではないことを知っていますか？ 少林寺拳法は昭和 22 (1947) 年に宗 道臣氏によって日本に伝えられましたが、その後日本拳法の要素を取り入れ、日本独自の“少林寺拳法”に発展しました。その後、宗氏の弟子の高橋法昇氏 (現、名大少林寺拳法部監督) が東海地方に少林寺拳法を紹介し、名大少林寺拳法部は昭和 42 (1967) 年に誕生しました。1980 年代前半には 100 人以上の部員を擁する超人気クラブでしたが、現在では 29 人が在籍しています。



図 17 コーナー 1 の「当世部活事情」の様子。

【舞踏研究会】

“ダンス”には、社交ダンスと競技ダンスがあり、舞踏研究会は競技ダンスの技術向上を目的とするクラブです。平成12(2000)年と平成16(2005)年の全日本学生選抜競技ダンス選手権大会で、野口 啓・水野由佳子組と中河智博・池中理恵組がそれぞれ優勝しているほか、平成7(1995)年には、大西大紀・祖父江早織組が10 ダンスアマチュア世界選手権日本代表選考会準優勝となり、世界選手権に出場しています。近年のダンスブームとともに、その活動はますます活発になっています。

【相撲部】

戦前、名高商相撲部は全国に名を馳せた名門でしたが、戦後に消滅してしまいました。その後、長らく名大には相撲部は存在しませんでした。細谷辰之氏(当時、経済学研究科)の尽力によって平成3(1991)年に復活を果たしました。平成14(2002)年には女子部員を迎え、鶴飼恵美氏(当時、理学部)は全国国公立大会で優勝をしています。また、現役部員の田中周一氏(工学部)は大相撲での活躍を期待されています。

【和式馬術部】

日本在来種の馬を使い、古式馬術の伝承と技術向上を目的とするクラブです(和式馬術部の展示をご覧下さい)。全国で和式馬術部を有する大学は名大だけです。小倉脩平氏(現主将、経済学部)の「様々な日本文化が後継者不足によって衰退していく中、日本オリジナルの古式馬術をなんとか継承し、後世に残したい」との一念によって、平成17(2005)年に設立されました。

【卓球部】

卓球部は、全国国公立卓球大会で優勝しています。そのときの様子は、雑誌『卓球王国』に掲載されました。

表1 コーナー1の展示資料リスト

展示物	種別	借用元、所有者など	展示物	種別	借用元、所有者など
スポーツ王国 慶知			戦後の名大スポーツ		
挑戦状	写真	写真集『名古屋大学の歴史』所収	昭和24年当時のグラブとスパイク	物品	硬式野球部
全国中等学校排球大会優勝旗	物品	キタン会	昭和37年当時の竹バット	物品	硬式野球部
対四高応援合戦	写真	『写真集 旧制四高青春譜』所収	愛知大学野球リーグ連盟功労賞楯	物品	硬式野球部
名高商陸上部とパークヒル	写真	キタン会	愛知大学野球リーグ連盟1	写真	硬式野球部
女子バレー部史(CD) 引用文	文章	女子バレー部	愛知大学野球リーグ連盟2	写真	硬式野球部
オリンピックと名大・慶知			法政戦に勝利	写真	硬式野球部
清川正二 ロス五輪金メダル	物品	秩父宮記念スポーツ博	昭和40年代のユニフォーム・スパイクなど	物品	硬式野球部
清川正二 ベルリン五輪銅メダル	物品	秩父宮記念スポーツ博	硬式野球部誌	物品	硬式野球部
清川正二 ロス五輪金メダル(レプリカ)	物品	名大博	女子バレー部発足時練習風景	写真	女子バレー部
清川正二 ベルリン五輪銅メダル(レプリカ)	物品	名大博	ジュディボウラニアタック写真1	写真	『西ネバール第3の峰』所収
清川正二 ロス五輪選手章	物品	秩父宮記念スポーツ博	ジュディボウラニアタック写真2	写真	『西ネバール第3の峰』所収
清川正二 ベルリン五輪選手章	物品	秩父宮記念スポーツ博	ジュディボウラニアタック写真3	写真	『西ネバール第3の峰』所収
清川正二 オリンピックオーダー銀賞	物品	秩父宮記念スポーツ博	ジュディボウラニアタック行程表	図表	『西ネバール第3の峰』所収
清川正二 ロス五輪新聞記事	記事	東京朝日新聞(S.7.8.14)	ジュディボウラニアタックメンバー表	図表	『西ネバール第3の峰』所収
清川正二 ロス五輪表彰台	写真	『オリンピック』所収	ジュディボウラニアタックピッケル	物品	堀田誠三
清川正二 ロス五輪優勝	写真	『朝日スポーツ』所収	ダイヤモンドフェース初登攀ピッケル	物品	星野流
清川正二 ロス・ベルリン五輪選手章	物品	秩父宮記念スポーツ博	夏山合宿 源次郎尾根ダイヤモンドフェース初登攀 55年7月	写真	星野流
ロス・ベルリン五輪愛知県勢リスト	図表		泰山合宿 剣岳 早月尾根 59年春	写真	長尾治
前畑秀子 ベルリン五輪決勝	写真	『オリンピック』所収	屏風岩第一ルンゼを登る 56年8月	写真	星野流
雑耍 八高・名高商			早月尾根から剣岳ドーム	写真	山崎伸二
稲垣登 横綱	物品	相撲部	黒部丸山東壁ルート登攀 80年7月	写真	小嶋 智
稲垣登 目録	書状	相撲部	夏山縦走中にて 63年8月	写真	大鈴寿一
稲垣登 横綱写真	写真	『名高商第一回生記念』所収	ウイング・オブ・ヤマハ (1/20モデル)	模型	大橋郁夫
1925年相撲部写真	写真	『名高商第一回生記念』所収	A級単一型12尺ディンギー (1/10モデル)	模型	大橋郁夫
1930年全国学生相撲大会専門学校対抗決勝準優勝賞状	書状	キタン会	ヨット部旗	物品	大橋郁夫
八高山岳部旗	物品	文書資料室	チタ I, II, III, 性能比較図	図表	大橋郁夫
第1回全国高等学校優勝競漕大会(昭和3年)優勝賞状	書状	漕艇部	チタ II 進水式	写真	大橋郁夫
第6回全国高等学校優勝競漕大会(昭和10年)新聞記事	記事	名古屋新聞(S10.8.5)	ハワイ沖を航行中のチタ II	写真	大橋郁夫
漕艇部写真(力漕)	写真	石岡繁雄	太平洋往復航海を終えて、チタ II 上で堀江氏と	写真	大橋郁夫
漕艇部写真(ボート部)	写真	永田直明	戸塚さん、おつかれさん!	写真	大橋郁夫
弓道分付帳	物品	弓道部	太平洋を航行中のウイング・オブ・ヤマハ	写真	大橋郁夫
全国弓道選手権名古屋大会優勝賞状	書状	キタン会	オーストラリア沖を航行中のとくまる	写真	大橋郁夫
テニス八高・名高商アベック優勝新聞記事	記事	東京朝日新聞(S12.7.29)	当館館蔵事情		
名高商庭球部会誌3-6号(S11-14)	物品	図書館・経済学部分室	少林寺拳法部看板	物品	少林寺拳法部
昭和7年7 全国高等商業学校陸上競技大会優勝トロフィー	物品	キタン会	少林寺拳法部写真	写真	少林寺拳法部
9回? 全国高等商業学校陸上競技大会優勝トロフィー	物品	キタン会	全国舞踏大会写真	写真	舞踏研究会
1, 2, 3, 7回 全国高等商業学校陸上競技大会優勝トロフィー	物品	キタン会	全日本学生選抜競技ダンス選手権大会トロフィー	物品	舞踏研究会
10回記念全国高等商業学校陸上競技大会優勝トロフィー	物品	キタン会	全国国公立卓球大会優勝賞状	書状	卓球部
5周年記念全国高等商業学校陸上競技大会3位トロフィー	物品	キタン会	全国国公立卓球大会優勝写真	写真	卓球部
全国高等商業学校陸上競技大会優勝旗	物品	キタン会	流鏝馬写真	写真	和式馬術部

コーナー2「名大の現在のスポーツ活動（展示室中央）」（図18～29）

（「運動部紹介コーナー」とタイトルを付けた。以下の運動部の現役部員が、自分たちでアイデアを出し、一部は自ら製作した。各部にはできるだけハンズオン展示をお願いし、道具やルールなどが似ている競技（例えば、アーチェリー部と弓道部、ソフトボール部と準硬式野球部と硬式野球、など）を並べて配置した。また、会期前半と後半で展示を入れ替える予定であったが、試合写真やビデオが集まらず、展示替えは行わなかった。その他、会期中に各運動部展示の人気投票を行った（表2）。）

出展運動部

サイクリング部、卓球部、硬式テニス部、ソフトボール部、準硬式野球部、硬式野球部、アメリカンフットボール部、ラグビー部、サッカー部、女子ラクロス部、アーチェリー部、弓道部、剣道部、合気道部、少林寺拳法部、馬術部、フォーミュラーチームFEM、舞踏研究会、相撲部、ボクシング部、女子バレー部、ヨット部（博物館前駐車場にて展示）、航空部（博物館ピロティニーにて展示）

名大トピックスより：現役部員による「運動部紹介コーナー」も見どころです。ここは各部が工夫を凝らして作りました。ありきたりな部活紹介ではなく、奇想天外な展示や、思わず笑ってしまうような展示、感心してしまう展示が満載で、「名大生もなかなかやるじゃん！」と思わされます。このコーナーでは、普段目にする事、手にすることのできない用具（ヨット、ボート、和弓、アーチェリー、剣道具、アメフトやラグビーのボール、馬術具、陸上のハンマー、各部ユニフォーム、その他いろいろ）に実際に触れられるのも特徴です。（名大トピックス No.156、p. 41）



図18 コーナー2「運動部紹介コーナー」の様子。

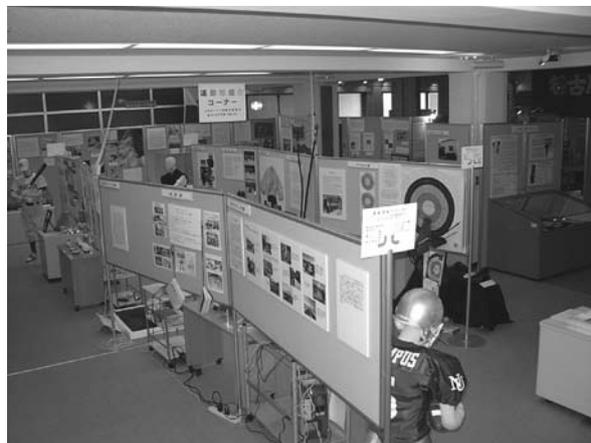


図19 コーナー2「運動部紹介コーナー」のボードワーク。90cm×210cmのボードを横に使い、各ボードがジグザグになるようにレイアウトした。



図20 ボクシング部の展示。リングを再現し、その中にマネキンを立たせることによって、ボクサーのファイティングスピリットを表現した。



図 21 馬術部の展示。馬の写真をふんだんに使い、動物のかわいらしさを前面に出した。

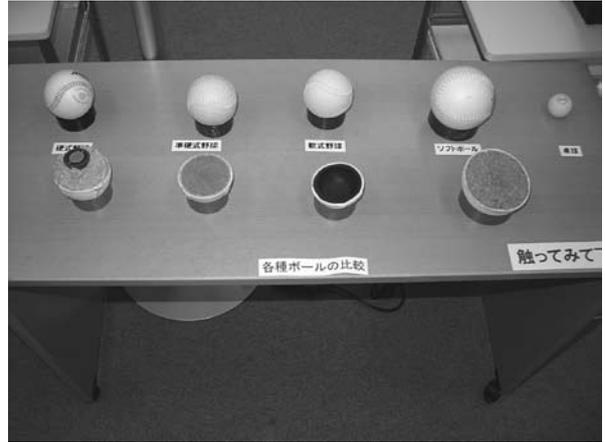


図 22 各種ボール（硬式野球、準硬式野球、軟式野球、ソフトボール、卓球）の内部構造比較。

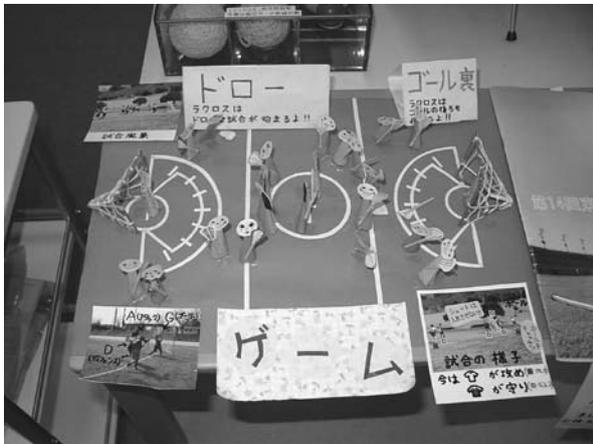


図 23 女子ラクロス部の手作りのルール解説。親しみやすいと、大変好評だった。



図 24 アーチェリー部（手前）と弓道部（奥）の展示。両部ともに、「弓」を来館者が持てるようにし、両者の重さ、質感、弦（ストリング）を引くときのフィーリングの違いを実感してもらった。



図 25 相撲部の展示。敢えて相撲に焦点を当てず、「名大式ちゃんこの作り方」をパネルで図解した。パネルとともに、「一回の食事で相撲部員が食べる量」を食品サンプルを使って表現した。



図 26 女子バレーボール部の展示。バレーボール女子の公式試合ネットを再現した。ネット高は試合と同じ 224 cm。



図 27 “フットボール”の展示。アメリカンフットボール部、ラグビー部、サッカー部の展示を並べ、それぞれのルールやボールの違いを比較できるようにした。スポーツ科学連続講座4回目の「スポーツのボールの社会史（講師：出原泰明教授）」では、それぞれが派生していった歴史について講演があった。



図 28 硬式野球部の展示（手前のバッター）。コーナー1「戦後の名大スポーツ【硬式野球部】」と相対するようにレイアウトした。「戦後の名大スポーツ【硬式野球部】」では昭和40年代のユニフォームを着たピッチャー（写真奥）を、「運動部紹介コーナー【硬式野球部】」では現在のユニフォームを着たバッター（写真手前）を立たせ、OBと現役の対決をイメージした。バッターの後ろには、ユニフォーム素材の変遷についてのパネル解説がある。



図 29 応援団の展示。大団旗を天井より吊るし、応援団の迫力を表現した。

表 2 運動部紹介コーナー人気投票結果

運動部	票	運動部	票	運動部	票
女子ラクロス	48	アーチェリー	18	ソフトボール	5
陸上	39	フォーミュラー	18	舞踏	5
馬術	33	弓道	16	合気道	4
和式馬術	27	ヨット	15	ボクシング	3
相撲	25	硬式野球	15	剣道	3
ラグビー	25	サイクリング	14	準硬式野球	3
アメフト	23	少林寺拳法	9	硬式テニス	2
サッカー	22	航空	9	バレー	1
漕艇	21	卓球	6	山岳	1

（単位：票）

コーナー3「スポーツと健康（展示室北側壁面）」—保体センター担当—（図30、31）

特別展開催中に、名古屋大学総合保健体育科学センター教員による、以下12回の「スポーツ科学連続講座」を行います。ここでは、連続講座に関連した展示を行っています。¹

「スポーツ科学連続講座」

- (1) 4月12日（水）池上康男：「滑る科学 —フィギュアスケート&スキー」
- (2) 4月26日（水）秋間 広：「運動、筋肉、宇宙の関係をスポーツ科学の観点から考えよう」
- (3) 5月10日（水）西田 保：「スポーツモチベーションを探る！」
- (4) 5月24日（水）出原泰明：「スポーツのボールの社会史」
- (5) 6月14日（水）布目寛幸：「サッカーファンタジスタの科学」
- (6) 6月28日（水）佐々木 康：「ボールゲームに求められる身体スキル
—ラグビーを中心とした国際競技力—」
- (7) 7月12日（水）石田浩司：「運動しないとどうなる？ —衰えを科学する—」
- (8) 7月26日（水）竹之内隆志：「スポーツと心の発達」
- (9) 8月9日（水）山本裕二：「複雑な運動の獲得」
- (10) 8月23日（水）蛭田秀一：「スポーツと体力」
- (11) 9月13日（水）高橋義雄：「スポーツとファッション」
- (12) 9月30日（土）島岡 清：「健康運動の科学」



図30 コーナー3「スポーツと健康」の展示。講座各回のテーマに合わせて、12回の展示入れ替えを行った。写真は、第11回「スポーツとファッション（講師：高橋義雄）」に合わせた展示。



図31 第11回「スポーツとファッション（講師：高橋義雄）」に合わせて展示された、北島康介選手²（左）と田中雅美選手³（右）がアテネ五輪で着用した水着。いずれもミズノ株式会社所蔵。

コーナー4「体育会の活動紹介と試合応援コーナー（展示室入り口扉横）」—体育会担当—（図32）

（当初計画では試合結果速報やグッズ販売などを計画していたが、諸事情により「特別展アウトライン」に挙げた全ての項目について実現ができなかった。以下、本コーナーの展示パネルを示す。）

¹ 会期中、講座各回のテーマに合わせて、12回の展示入れ替えを行った。

² アテネ五輪金メダリスト

³ シドニー五輪銅メダリスト

<愛知のボート熱>

ボート競技（漕艇競技）というものをご存じでしょうか？ 今でこそあまりメジャーなスポーツではありませんが、戦前は大変な人気を博し、特に明治から昭和初頭にかけてはスポーツの花形といっても過言ではありませんでした。ボート競技の人気は愛知でも高く、明治・大正期には中等学校や高等学校が新設されると、「一番はじめにやることとして、まずは漕艇部を創部」という状況でした。

中川春好氏がベルリンへ向かう途中で名古屋に寄ったときには、東海ボート界の重鎮であった齊藤眞氏（当時、名古屋医科大教授）をはじめ、たくさんの関係者が名古屋駅まで出迎え、大歓迎したとのことでした。

<戦争と漕艇部>

昭和10年代中頃になると、学生スポーツも戦時体制下に置かれるようになりました。各学校の運動部をまとめていた学友会は報国団と名を変え、柔道や剣道などの“国防競技”が奨励されるようになりました。海外からの輸入スポーツのクラブが衰退していく中、漕艇部は海軍の庇護のもと「海事訓練」という名目で生き残りました。このころになると、「海軍記念日大会」が毎年開催されるようになります。

<戦後の漕艇部>

戦争によって、日本のスポーツ界は壊滅的打撃を受けました。八高・名帝大のボート庫は幸い戦災を免れましたが、戦後の食糧難と物資不足の中、漕艇部の再建は至難でした。昭和21（1946）年の第1回国体（兼全日本選手権）では、旧制名大医学専門部クルーが当時最強の東大と死闘を繰り広げ、昭和23（1948）年には八高が二高を押さえてインターハイ優勝を飾っています。しかし昭和22（1947）年の名阪戦では、漕艇部長の齊藤眞氏に「（名大のゴールを待つのは）お次の列車を待っとるようなものだ」と言わせたほどの圧倒的大敗を喫しましたが、その後、昭和25（1950）年の全日本選手権では準優勝を果たしました。昭和36（1961）年、昭和43（1968）年、平成11（1999）年には、日本三大レガッタの一つである中日本レガッタで優勝をしています。

【和式馬術部】（図34）

<和式馬術部について>

和式馬術部は平成17年9月に体育会に準加盟したばかりの新しい部活動です。日本には古来より固有の馬具を用いた馬術があります。残念ながら、その存在はあまり知られていません。私たちは、これらを習得、研究し、和式馬術をより親しんで取り組める場を作るため部活動設立に至りました。当和式馬術部は、国公立大学では初めての日本伝統馬術の運動と研究実践の場となります。主な活動として神社などに流鏝馬を奉納するために、騎射を鍛錬しています。



図34 和式馬術部の展示。

<和種馬について>

合戦絵巻物などで、在来馬を見たことはありますか？ テレビや映画劇とは馬たちがいきいきと描かれています。現在、馬術といえば、西洋式、サラブレッドが主流です。日本古来の馬は、実用としてもイメージとしても、薄れていく一方というのが現状です。在来馬に活躍の場を与えることこそが、保存につながると思っています。日本の伝統馬

術文化の復興を目指すことにより、和種馬がかつて戦場を駆け回った勇姿のごとく、誇らしい姿を取り戻すことが私たちの目標です。

【陸上部】(図 35)

陸上部は、同部 OB の水谷伸二郎本学名誉教授の指揮のもと、図 35 のような展示を行った。

展示解説：駅伝って面白い？

(図 35 の手前マネキン)

ただ、たすきを一本つなぐだけなのに、駅伝は様々なドラマを生みます。仲間のためにがんばる力がタイムとなって如実に現れるこの競技は決して投げ出せないし、皆の思いがしみこんだ襷を肩にかけ走ることは誇りでもあります。その襷にもドラマがあるって知ってました？

平成 16 年、名大は全日本大学駅伝（熱田神宮～伊勢神宮駅伝）に出場したのですが、その時に使用した襷は少し訳ありです。この襷は、平成 15 年に亡くなられた嶋本直之氏（平成 13 年卒）のご両親から頂いたもので、部員の井上（当時）が熱田神宮～伊勢神宮間のコースを歩いて購入したお守りが縫いつけてあります。このレースでは様々な想いの詰まった襷と共に、部員一同、一丸となって戦いましたが、残念なことに熱田神宮を出発した襷は繰り上げ出発という関門にあり、伊勢神宮にたどりつくことが出来ませんでした。今年こそ、熱田神宮～伊勢神宮を一本の襷で走り抜きたいです。

なお、この時は OB の嘉賀氏より寄付して頂いた、おそろいの靴下でレースを行いました。駅伝には部員だけでなく、OB の方など多くの人の思いが詰まっていて、だからこそ面白いのかな！？

コーナー 6 「探しています（階段踊り場）」(図 36a)

探しています

今回の特別展のために集めた物の中には、その由来が分からないものがたくさんあります。それら



図 35 陸上部の展示。



図 36 コーナー 5 「探しています」の展示。

のうち、名高商に関する物をここでは展示しています。由来をご存じの方がおられましたら、ぜひ、ご一報下さい。

『陸上インターハイ楯』（図 36b）

キタン会事務局の記念品保管室にありました。楯をかたどっており、周囲には「TRACK & FIELD」、「INTER-HIGHSCHOOL」などの文字が見えます。中央には名高商の校章が描かれています。これは、1938年の物ですが、その他、いろいろな年の物があります。何のために作成した物か、ご存じの方は、ご一報下さい。

『テニス部優勝楯？』

キタン会事務局の記念品保管室にありました。名高商テニス部が優勝したときの楯のようですが、いつのどの大会で優勝したときの物か、分かりません。

『優勝弓』（図 37）

キタン会*事務局の記念品保管室にありました。実用品ではなく、飾り弓です。収納箱のふたには「東海学生連盟」と書いてあり、名高商が何かの大会で優勝したときの、記念品と思われます。しかし、いつの、どのような大会なのか、分かりません。



図 37 優勝弓と馬術部部旗。

『馬術部部旗』（図 37）

キタン会事務局の記念品保管室にありました。名高商馬術部の旗です。

臨時コーナー「日比野寛コーナー（コーナー 3 向かい）」（図 38、39）

秩父宮記念スポーツ博物館の御厚意により、旧制愛知第一中学（現愛知県立旭丘高等学校）の校長をつとめ、“マラソン王”とも呼ばれた日比野寛氏に関する資料を借用し、「日比野寛コーナー」を臨時に設けました。



図 38 臨時コーナー「日比野寛コーナー」の様子。



図 39 秩父宮記念スポーツ博物館より借用した、直筆掛け軸や氏の健康管理記録など、日比野寛ゆかりの資料。

4. 特別展の広報について

本展を広く知ってもらうため、ポスターやビラを作成し、学内各所に掲示するとともに、市内の公共機関、全国の博物館・美術館などに掲示をお願いした。ポスターの図案には「墨絵のスポーツ - 斎辰雄画集」所収の画を使用した。⁴ その他、学内8つの飲食施設にポスターの掲示をお願いし、テーブルに卓上ビラを設置した(図40)。マスコミ各社に特別展開催の情報を流し、中日新聞、朝日新聞、名古屋タイムズ、スターキャットテレビより直接取材を受けた。その他、学協会広報誌「U7」にて取り上げられたほか、中日新聞で名古屋大学スポーツにまつわるトピックスについて、全5回の連載記事を執筆した(表3、図41)。名古屋大学博物館のホームページに情報をアップした。

NUM 第四回名古屋大学博物館特別展

スポーツと名古屋大学 す・み・る・つ・く

2006年3月22日(水)
～9月30日(土)

入場無料



Get fit!
They Watch, Count

名古屋大学博物館
(正門を入ってすぐ右側、豊田講堂の斜め横)
http://num.nagoya-u.ac.jp
問い合わせ先: 052-789-5767

共催: 総合保健体育科学センター、体育会

名古屋大学のスポーツの歴史と概要のコーナー

皆さんは、昔、名大がスポーツ強豪校だったことを知っていますか?
例えば、名古屋高等商業学校(名大前身)の清川正三さんは、ロサンゼルスオリンピックの100m背泳で金メダルを獲得していますし、同校の稲垣 登さんは、1924年に学生横綱になっています。戦後は、陸上部の高川敏夫さんが全国大会110mハードル走で、早稲田、慶応を押さえて優勝しています。このような意外と知られていない名大のスポーツ史を掘り起こし、紹介します。

スポーツ科学のコーナー

本展開催イベントとして、総合保健体育科学センターの教員による全12回のスポーツ科学連続講座を行います。それに合わせて、ここでは科学の視点からスポーツに切り込みます。スポーツは人間にどのような影響を与えているのか、本当にそれだけのものなのでしょうか。経済学的見地からは? 社会的見地からは? いろいろな角度から、「スポーツ」を検証します。

各運動部の紹介コーナー

運動部のありのままの姿を紹介します。このコーナーは、現役部員が自分のアイデアで作りました。知っているようで知らない部員の生活やスポーツのトリビア、ユニークな部活動など、様々な「驚き」を発見できるでしょう。また、普段目にすること、手にすることのできない用具(ヨット、ボート、箱弓、アーチェリー、剣道具、アメフトやラグビーのボール、馬術具、グライダーの翼、陸上のハンマー、各部ユニフォーム、その他いろいろ)に触れられます。

試合応援コーナー

春から秋にかけて、名阪戦や七代戦、東海地区国公立大学体育大会、各種対校戦など、本学にとって重要な試合が開催されます。特別展開催中、それらの試合を皆で応援しようというコーナーです。本コーナーは、6月中旬以降、大きく拡充する予定です。

図40 飲食施設に設置した卓上ビラ
(上:表面、下:裏面)。

[27] 大学生 ☆ 2006年(平成18年)7月11日(火曜日)

「これで走と足が痛くね」。名大硬式野球部監督の野瀬彰(一九六六年工学部卒)は、野球焼けした顔で笑った。テニールには古びたスパイクが、一足金具は靴に固定され、内側にくきの頭が出っ張っていた。バットはクリップがテープでぐるぐる巻きにされている。

「練習は安い竹バットを使って、折れたらすぐで打テニールで補修して、ボロボロになるまで使った」と自身も野球部員だった野瀬は学生時代を振り返った。硬式野球部は、立松延広(五五年法学部卒)の「おい、野球でももうつかの」一声で始まった。三度の飯よりも野球が

好きな人がいた。終戦後の四九年、物かげ、同年代に大学で「回りのリーグ」は、日本中が騒がれていた。三人は、戦をしたら。名大は五年秋のリーグまで五連覇した。五〇年には関西遠征に行く途中で名古屋に立ち寄った。東大六大学の雄、法政大との親善試合に勝利。全く無名の名大に

硬式野球部と陸上競技

スパイクが強さを証明




昭和20年代から30年代に、硬式野球部で使っていた用具。テニールは立松が使っていたもの

全日本学生陸上の優勝台に立つ高川(右)2位は早稲田の左3位は慶応の選手

負けた法政は、関西遠征をキャンセル。全員丸刈りになって伊豆で合宿を行った。野球部五十周年記念誌にある。この勝利が、愛知リーグのレベルの高さを全国に知らしめ全日本学生野球大会への出場を認められるきっかけとなった。

高川敏夫(五一年医学部卒)は五〇年、全日本学生陸上二〇〇メートルの覇者。早稲田と慶応を一位、二位に凌駕した表彰写真前に喜びに語った。「一瞬、舞クラウンドの横に米軍の宿舎があった。練習していたら将校が見て来た。「こっちは来い」と言ったら何事かと思っつけて行ったら、新品のスパイクを差し出してこれを履け」と言っただけ。僕のがボロボロだったから、見えないかねたんだね」

ある時、高川は脳神経外科教授の音藤真に呼び出された。「団体に出る高川といっのは君か。ワシの授業にはもう出なくて良い。その代わりに必ずで練習なさい」。おろかな時代である。(敬称略)

図41 中日新聞の連載記事。

表3 中日新聞連載記事「スポーツと名古屋大学」タイトル一覧

	記事タイトル	掲載日(全て朝刊)
第一回	日本初ヨット太平洋往復航海 世界トップグループに	4月4日
第二回	第6代全国学生横綱・稲垣 登 豪放で負けん気人一倍	5月2日
第三回	ロス五輪100背泳ぎ金・清川正二 生涯実直な“水泳少年”	5月30日
第四回	硬式野球部と陸上競技 スパイクが強さを証明	7月11日
第五回	全国で唯一の和式馬術部 熱く保存を目指す	8月1日

⁴ 原画所有者の秩父宮記念スポーツ博物館には画の使用について快く承諾していただいた。

5. 特別展関連イベント

前述のように、各運動部より多数の関連イベント開催の希望があったが、実現したのは以下の8イベントである。流鏑馬のデモンストレーション⁵（和式馬術部）、演武（少林寺拳法部）、公開スパーリング（ボクシング部）、アメリカンフットボール体験とキック大会（アメリカンフットボール部）、OB総会（ヨット部、陸上部）、試射会（弓道部）、OB名阪戦（卓球部）。前4つのイベントは一般に公開し、特に和式馬術部による流鏑馬デモ



図 42 流鏑馬デモンストレーションの様子。

ンストレーションは、400人弱の一般観覧客を集めたほか、名古屋大学教育学部附属高校のSSH事業とジョイントし、富田武本学名誉教授による附属高校生向け特別講義「日本馬のふるさと」と連続開催した（図42）。相撲部のちゃんこ試食会と舞踏研究会の舞踏コンサートは、開催に向けて鋭意努力したが、諸事情により断念せざるを得なかった。また、保体センター教員による全12回のスポーツ科学連続講座を開催し、各回50～70人の聴講者があった。その他、スポーツ科学連続講座（番外編）として、秩父宮記念スポーツ博物館の三上孝道主幹による講演「愛知県ゆかりのアスリートとスポーツ秘話」を開催した。「特別展アウトライン」に盛り込まれていた、「スポーツ大会」、「名阪戦・東国体・七大戦壮行会とのタイアップ」、「ワールドカップ放映」は、日程の折り合いなどの諸事情により開催を断念した。特別展最終日の9月30日には、名古屋大学ホームカミングデー行事と合わせて、清水哲太トヨタホーム会長（山岳部OB）、松本正之JR東海社長（陸上部OB）、斉藤英彦名古屋セントラル病院院長（テニス部OB）の3人を招いて、「運動部OBと現役学生のパネルディスカッション」を開催した。会場には200人以上の運動部OBと現役学生が参加し、大変盛況であった。

6. 来館者アンケート

会期中に8054人の来館者があり、そのうち555人（来館者の約6.9%）がアンケートに回答した。特に若い世代の回答数が際だって多く、20歳代以下の回答が全体の40.0%を占めた。「また来たいか？ 友達に薦めたいか？」の質問に、442人（79.6%）が「はい」と答え、特に20歳代では83人中70人（84.3%）が「はい」を選択した（表4）。「名古屋大学のスポーツの歴史（以下、名大スポーツの歴史）」、「運動部紹介（トピックコーナーを含む）」、「スポーツと健康」の各コーナーについて、それぞれに興味を持ったか否かを質問した。その結果、20歳代以下では多くの者が「運動部紹介」に興味を示したのに対し（同世代の56%）、30歳以上では「名大スポーツの歴史」へ興味を示す者が多かった。特に50歳以上で、その傾向は顕著に見られた（50歳以上の50.5%）。全てに「興味を持てなかった」と回答した者の割合は、年齢層が上がるにつれて高くなった（表4）。

⁵ 紅葉台木曾馬牧場と甲州和式馬術探求会の協力を得て実施した。

表4 来館者アンケート分析結果

世代別の特別展全体と各コーナーへの関心度

	19歳以下	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上
特別展にまた来たい、友人に薦めたい	102 (76.7)	70 (84.3)	22 (81.5)	69 (81.2)	66 (79.5)	63 (76.8)	44 (83.0)
名大スポーツの歴史に興味をもった	39 (29.3)	20 (24.1)	14(51.9)	34(40.0)	38(45.8)	43(52.4)	29(54.7)
運動部紹介に興味をもった	74(55.6)	47(56.7)	10 (37.0)	33 (38.8)	22 (26.5)	24 (29.3)	18 (34.0)
スポーツと健康に興味をもった	26 (19.5)	18 (21.7)	7 (25.9)	21 (24.7)	21 (25.3)	23 (28.0)	18 (34.0)
全てに「興味をもてなかった」	7 (5.2)	8 (9.6)	1 (3.7)	10 (11.8)	10 (12.0)	11 (13.4)	6 (11.3)
自由記載欄への感想意見の記述あり	32(24.0)	48(57.8)	11(40.7)	18(21.2)	18(21.7)	20(24.4)	7(13.2)
世代別回答者数	133	83	27	85	83	82	53

(単位:人、括弧内は各世代の中で占める割合%、年齢不回答の9人は含めず)

階層別の特別展全体と各コーナーへの関心度

	学外大学生	高校生	中学生	小学生	名大生	名大職員	社会人	社会人(20代以下)
特別展にまた来たい、友人に薦めたい	44(78.6)	51(86.4)	3(100)	8(80.0)	57(75.0)	10(71.4)	164(78.5)	10(83.3)
名大スポーツの歴史に興味をもった	18(32.1)	13(22.0)	0(0)	4(40.0)	22(28.9)	5(35.7)	99(47.4)	3(25.0)
運動部紹介に興味をもった	28(50.0)	39(66.1)	3(100)	2(20.0)	41(53.9)	4(28.6)	75(35.9)	8(66.7)
スポーツと健康に興味をもった	13(23.2)	9(15.3)	3(100)	3(30.0)	18(23.7)	2(14.3)	57(27.3)	3(25.0)
全てに「興味をもてなかった」	6(10.7)	1(1.7)	0(0)	3(30.0)	3(3.9)	3(21.4)	25(12.0)	1(8.3)
階層別回答者数	56	59	3	10	76	14	209	12

(単位:人、括弧内は各階層の中で占める割合%)

階層別では、名大構成員のうち学生は「運動部紹介」に特に高い興味を示す傾向が見られた。また「運動部紹介」は、学内外を問わず高校生以上の学生に評判がよい傾向が見られた。社会人全体では「名大スポーツの歴史」への関心度が高かったが、20歳代以下だけを抽出すると「運動部紹介」がもっともポイントが高かった(表4)。以上のように、学生・社会人を問わず20歳代以下の若い世代は「運動部紹介」への、30歳以上、特に50歳以上の世代は「名大スポーツの歴史」への関心が高かったことが明らかとなった。

自由記載欄への記入の存否は、回答者の展示に対するポテンシャルを量る物差しとなりうる。アンケート回答者のうち155人(全体の28.2%)が自由記載欄に感想・意見を記入しているが、20歳代のみを抽出すると、その57.8%が自由記載欄への記入をしている(表4)。20歳代以下の大多数はポジティブな感想・意見を記入しているが、一方で40歳代以上の世代ではネガティブな意見が目立った。なお、今回のメインターゲットである名大生の自由記載欄への記入率は39.5%であり、ポジティブな感想・意見がそのうち86.7%を占めた。ネガティブな意見はすべて「進み方(順路)がよくわからない」というものであった。全体では、「体験できるもの(触れるもの)が多く、楽しい」という意見が最も多く(12人)、「パソコンやビデオなどの映像が面白かった(わかりやすかった)」という意見(7人)がそれに次いだ。その他、名大生以外からも「進み方(順路)がよくわからない」という意見が複数あった。展示内容についてネガティブな意見はあまり見られないが、「運動部紹介」の展示手法については、「統一感がなく、素人的すぎる」と「各運動部の個性がよく出ていてよい。また手作り感に好感が持て、親近感を覚える」の賛否両論があった。前者は40歳以上の高年齢層に、後者は30歳代以下の若い世代に多く見られた。以上アンケート結果をまとめると、本特別展は総じて若い世代に受けが良かった一方、高年齢層には必ずしも満足できるものでなかったという傾向が見られた。

20歳代以下の若年層、特に名大生(本展のメインターゲット)に好評であったということは、本展の内容・コンセプト・アウトラインが基本的に間違っていなかったことを示す。しかし、来館者に占

める名大生の割合は必ずしも高いとは言えず、今後、広報について再考する必要がある。以下、自由記載欄の主な感想、意見を示す。

内容について

<ポジティブ>

- ・アメフト部のCMがおもしろかった。ラクロスもかわいい（19歳以下、女性、名大生）
- ・すごく面白かった！名大のスポーツの歴史がよく分った。陸上の名シーンをのせるのが Good! もっと名シーンを見せてほしい！（19歳以下、男性、名大生）
- ・秋間先生の発表はわかりやすくよかったです。（19歳以下、男性、名大生）
- ・スポーツ科学がおもしろかったです。（19歳以下、女性、名大生）
- ・自分のやらないスポーツを知ることができ、面白かったです。実際に道具に触れると、より興味が持てて、楽しかったです。（19歳以下、男性、名大生）
- ・大学の運動部はやはり大掛かりだと驚いた。（19歳以下、男性、高校生）
- ・名大の運動部について興味もてる内容だった。（19歳以下、男性、中学生）
- ・名古屋大学卒業生がオリンピックでメダルをとっていたことをはじめて知りました。メダルを見ることが出来てよかったです。春から名大生なので通いたいと思います。（20代、女性、名大生）
- ・陸上部のたすきの話がおもしろかったです。（20代、女性、名大生）
- ・陸上部が素晴らしかった。（20代、男性、名大生）
- ・馬術、自動車など通常見聞きすることの少ない部活の品々に触れる良い機会だと思う。（20代、男性、名大生）
- ・愛知出身の意外な有名スポーツ選手がいて驚いた。（20代、男性、大学生）
- ・学生横綱がやせ気味（すもうについて）だったのに驚いた。（20代、男性、大学生）
- ・ユニークな展示が多く、クラブ内容や特色がよくわかりました。（20代、女性、社会人）
- ・国枝先生がハンマー投げの記録をつくったと知り、驚きました。（20代、男性）
- ・健康運動の科学、面白いです。（50代、男性、社会人）
- ・歴史を追って体育会の活動が紹介されていてよかった。（30代、男性、社会人）
- ・歴史を感じました。子供にも見せたいです。（30代、女性、社会人）
- ・戸塚宏氏が名大OBとは知らなかった。戸塚氏は自己の信念に基づき法的処分にも決して同意できないと明言した上、再び活動しているとの話を聞き、すごいと思った。（40代、男性、社会人）
- ・応援団の団員数が少なくてさびしい。相撲部のちゃんこ料理は参考になります。おいしそう！！野球部はかつては一部校だったのに、いつのまにか3部校。今回の6月3日の入替戦では是非2部昇格を！！（50代、男性、社会人）
- ・八高と四高の対抗戦、感激しました。（60代、男性）
- ・スポーツ選手の生活の一部を少し理解できたのしかった。（60代、女性）
- ・昔の学生さん達の努力に感心しました。（60代、女性）
- ・1. おもしろい講義だった。もっとPRして一般市民を集めたらどうか。2. 「ゴルフの科学」「野球の科学（バッティング、投球的な）」が聞きたい。（60代、男性、社会人）

<ネガティブ>

- ・もっと1コ1コの歴史について知りたかった。（20代、男性、社会人）
- ・現役学生の紹介（部員の数）があると楽しいです。（30代、男性、社会人）
- ・もっと、1クラブあたり詳しくしてもよいのかもしれない。ルール説明、戦績、機構の仕組みなど。（40代、男性、名大職員）
- ・紹介コーナーの展示の内容と質に差がありすぎるように感じた。（50代、男性、社会人）
- ・少々スポーツものが多い。もう少し学術的なものを望む。（60代、男性）
- ・硬式テニス部にはがっかり。（60代、男性、社会人）

- ・期待を裏切られた感じ。歴史コーナーに期待（展示が沢山あるだろうと）して来たが、ほとんど展示物なし。(70代以上、男性)

展示手法などについて

<ポジティブ>

- ・パソコンを使った紹介がわかりやすくてよかった。(19歳以下、男性、名大生)
- ・さわったり、体験したりできて楽しかったです。もっとふやしてほしいです。(19歳以下、女性)
- ・テレビ（ビデオ）や写真が見ることができてとても分りやすいです。テレビのそばにイスを少しふやしてすわってゆっくり見られるようにしたらいいと思います。初めての博物館に来たけれど名古屋大学の歴史や研究のことがよく分かっておもしろかったです。また来て今度はもっと資料などをしっかり見ていきたいです。(19歳以下、男性、小学生)
- ・実物を展示すると親近感がわく。(19歳以下、男性)
- ・PCでいろいろ見えるのはすごく良かったです。(20代、女性、名大生)
- ・触って考えたり、違いを見つけたりできてとても楽しいです。(20代、女性、大学生)
- ・興味がある人は何にもしなくても興味が深まるので、分野に全く興味がない人をいかに引き付けるかが問題だと思う。そういった点で競技の試合映像は、なじみのない競技も興味を持てた。(20代、男性、大学生)
- ・体験型でとても楽しく見学できました。(20代、女性、大学生)
- ・各運動部の紹介の文で、部の雰囲気などが伝わってくる感じがしました。(20代、女性、大学生)
- ・各部それぞれに特色ある展示物があり、おもしろかったです。(20代、男性、社会人)
- ・手作り感がある。興味を持った人が行けるように部室の場所などを示してはどうか。(20代、男性、社会人)
- ・各運動部の個性がそれぞれ出ていてとても楽しかったです。直に触れることも魅力的でした。学生の皆さん青春をおう歌して、たくさん笑ってえ！！(20代、女性、社会人)
- ・マネキンやモニターがあり、分りやすかったです。(20代、女性)
- ・とてもまとめられていて良かったです。工夫もある。ボールの断面なんて見られないし。(30代、女性、社会人)
- ・手作り感がグッド。(30代、男性、社会人)
- ・手にとって見られるものが色々あったのが良かった。ハンマー投げのハンマーがすごく重くてびっくりした。(30代、卒業生)
- ・ちゃんこ鍋のレシピ、写しました。家で作ります。用具類を手にとれることが良かったです。弓道の弓を前から触って見たかったので、とても参考になりました。(30代、女性)
- ・子どもをつれていたので、アザラシ型ロボット、どんぐりの名、ちゃんこのひとりの量など視覚的にたのしめたり、さわれたりするのもあって良かったです。出雲駅伝、応援してます。がんばって！！(40代、女性、主婦)
- ・狭い空間を上手に活用している。(40代、男性、社会人)
- ・手に取る事が出来たのでより理解することが出来ました。砲丸投の重さや、弓道の弓矢とアーチェリーの違い、ちゃんこの量など。展示品の古さに歴史を感じます。(40代、女性、社会人)
- ・ディスプレイが楽しい。マネキン人形が人間の姿でおもしろい。(40代、女性、社会人)
- ・ビデオが多く分りやすい。(50代、男性、社会人)
- ・展示内容は、理解を助けるように展示してあると思った。貴重な当時の新聞のコピーなど興味があった。あまりなじみのない人の活躍もあり、金メダルも昨今の物に比べると地味で、それ故価値が有るように思った。貴重な品を拜見できて、来た甲斐がありました。(70代以上、男性)

<ネガティブ>

- ・順序がわからず、回りづらい。(19歳以下、女性、名大生)
- ・触れるものが少なく残念だった。(19歳以下、女性)
- ・パネルも各部個性が出ていたと思うが、やや粗い過ぎ感もあった。(20代、男性、大学生)

- ・ 展示の配列がばらついていて、見る順がわかりづらかった。(20代、女性、大学生)
- ・ ちょっとごちゃごちゃしてますね…。(20代、女性、社会人)
- ・ 各部の展示物をもっと間隔を空けて展示をするとよいと思いました。(20代、男性、社会人)
- ・ 学芸員による展示解説とかあるといいですね。(30代、男性、社会人)
- ・ 手に触れられるようになっているものが、もっと多いと良いのですが。(30代、男性)
- ・ ばらばらした展示に見えるので、もっと統一感がある方が見やすい。(40代、男性)
- ・ 近年の試合結果もあるとよいと思います。(40代、女性、社会人)
- ・ 順路など矢印があると見やすい。見た所と見てないところわからなくなってしまう。(40代、女性、社会人)
- ・ 展示の仕方がわるい。(40代、女性、主婦)
- ・ 展示スペースが狭い。(60代、男性)
- ・ アマチュア的過ぎる。(50代、男性、名大職員)
- ・ クラブの系統毎に展示すれば比較もしやすい。(50代、男性、社会人)
- ・ スペースの問題でしょう。言葉は適切でないが、「ちんけ」な感じがしました。(50代、男性、社会人)
- ・ 展示場のスペース問題もありますが、いますこし立体的に見やすいよう配置、展示に一考を。(50代、男性、社会人)
- ・ 各運動部の展示はいいかげんな感じ。(60代、男性)
- ・ 1. ゴチャゴチャしている。2. 何故体育会全部の部を紹介しないの？(展示で)。有料にして、内容を充実せんと集客できないと思う。(70代以上、男性、社会人)

その他

- ・ 入場料がただではすばらしいです。(19歳以下、男性、名大生)
- ・ なぜここまで宣伝しているのか？(20代、男性、大学生)
- ・ 自信を持って元気で活躍して欲しい。(60代、男性、社会人)